

大豆ニュース No.3

～湿害・干ばつ、病害虫対策～

令和 8年 7月 30日
巻農業普及指導センター

1 生育状況

- 播種後の適度な降雨等により、出芽は良好でしたが、6月20日以降、雨天が多く、生育量は小さく、生育の進みはやや遅くなっています。
- 開花期は、エンレイ、里のほほえみとも7月第6半旬でした。

2 湿害対策

※ 7月23日以降、断続的に強雨が続き、一時的に畝上までの冠水も見られています。7月末まで降雨が予報されていますので、湿害対策を徹底しましょう。

(1) 排水対策の徹底

- 本暗渠が設置されているほ場は、暗渠栓を開放し、速やかな排水に努めましょう。
- 明渠内や畝間と明渠連結部分等の土砂やごみは除去して、排水機能を高めましょう。

(2) 湿害による葉の黄化対策

- 湿害により葉の黄化症状が見られたら、化成肥料(単肥)を窒素成分で1～2kg/10aを施用しましょう。

(3) 梅雨明け後の土壌水分の維持

- 梅雨明け後は基本的に暗渠栓を閉め、土壌水分の保持に努めましょう。

3 干ばつ対策

※ 大豆の開花期～子実肥大期(8月下旬頃)まで、大豆は蒸散量が多くなり、生育期間中で最も水分要求量が多い時期です。気象予報に注意し、まとまった降雨が期待できない場合は、干ばつ対策を徹底しましょう。

(1) 暗渠栓の管理

- 本暗渠が設置されているほ場は、暗渠栓を閉め、土壌水分を逃さないようにしましょう。
- 降雨により地下水位の急激な上昇が予想される場合や排水不良で常に地下水位の高いほ場では、大豆の生育を確認しながら暗渠栓を管理しましょう。

(2) 畝間かん水の実施

畝間かん水 実施ほ場の条件	かん水してもほ場に水が停滞しない排水の良いほ場 (1日以内に地表水を排水できる、本暗渠に補助暗渠が施工してある等)
実施期間	開花期から登熟期前半(9月上旬)頃まで

ア かん水のめやす

- 乾燥により生育が遅延している場合や朝夕の時間帯に最頂葉中央の個葉が直立し、ほ場全体で葉の裏面が目立ってきた場合は**速やかにかん水**しましょう。



最頂葉中央の個葉が直立する



ほ場では葉の裏面が目立ってくる

イ かん水の方法

- かん水の程度
 - 【地下かんがいの場合】: 畝間に水が染み渡る程度まで
 - 【地表かんがいの場合】: 水尻側の畝間まで水が行き渡る程度まで
- かん水時は暗渠栓を閉じ、かん水終了後に開放しましょう。また、湿害を防止するため、畝の上までのかん水はしないでください。
- 大区画ほ場では、水尻側に水が行き渡るまでの間に一度に畝間かん水を行うと、水口側で湿害を起し減収の一因となりますので、**数日に分けて徐々にかん水**しましょう。

4 病害虫防除

(1) 紫斑病

- 防除薬剤として、アミスター20フロアブルは1回散布、他の薬剤は2回散布を基本とします。
- 散布適期は以下のとおりです。
 - 1回散布の場合⇒開花期4週間後頃。但し、「里のほほえみ」でアミスター20フロアブルを使用する場合は、散布時期を開花期5週間まで延長しても防除効果が期待できます。
 - 2回散布の場合⇒開花期3週間後頃と4週間後頃、または開花期4週間後頃と5週間後頃
- (※開花期: 1花以上開花した株が、ほ場全体の4割以上に達した時期)
- 出芽の不揃いや湿害の影響などで、ほ場内で開花のばらつきが大きい場合には、開花期の早い大豆に合わせて防除しましょう。

(2) 葉焼病

- 葉焼病は病原細菌が風雨で運ばれて気孔や傷口から侵入し、斑点病斑が現れます。激しく発病すると葉全体が焼けたようになり、落葉・枯死する場合があります。発病すると減収や小粒化などの被害につながります。
- 里のほほえみは、エンレイより葉焼病が発生しやすいため、8月上中旬に登録薬剤を1回散布しましょう。



(3) マメシンクイガ

- マメシンクイガの防除時期は、通常の発生の場合、9月第1～2半旬(薬効が長い殺虫剤を使用する場合は8月第5半旬～9月第1半旬)が適期です。
- 連作ほ場で多発生(被害粒率が10%を超える)の場合は、8月第6半旬と9月第2半旬の2回散布としましょう。薬効が長い殺虫剤を使用する場合は、8月第6半旬に1回の散布とします。
- 雑草が繁茂していると莢への農薬の付着量が減少し、防除効果が低下するので、雑草を除去してから薬剤散布しましょう。

(4)カメムシ類【近年多発生】

○ ダイズカメムシ類は、開花後2週間ほど経過し、莢が大きくなりだす頃から増え始めます。

※ 大豆の生育ステージによるカメムシ被害の状況

加害時期	大豆の被害	生産への影響
莢伸長初期～子実肥大初期	落莢、板豆、変形が激しい粒	収量低下
莢伸長中期以降	扁平粒、奇形粒	品質低下

○ 加害が激しい場合は子実への養分転流が進まないため、茎葉がいつまでも緑色のまま落葉せず、青立ち状態となります。

表2 ダイズカメムシ防除適期(ダイズカメムシ防除マニュアル(農研機構)より)

発生程度	防除回数	散布時期	
被害程度中 被害粒率10～20%と予想される場合	1回	子実肥大初期	開花30～40日後(8月第6～9月第1半旬)
被害程度多 被害粒率20%以上と予想される場合	2回	莢伸長後期	開花20～30日後(8月下旬)
		子実肥大中期	開花40～50日後(9月中旬)

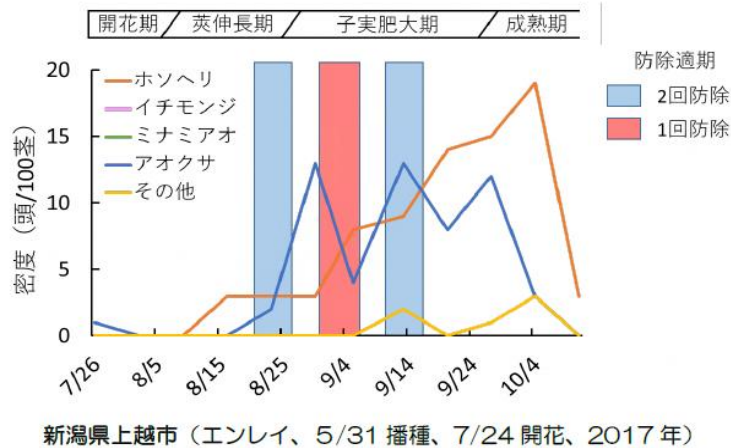


図 新潟県大豆ほ場におけるダイズカメムシ類の発生消長および防除適期
(ダイズカメムシ類対策マニュアル(農研機構)より)

カメムシ吸実とあばた粒の発生により青立ちしたほ場(R2.10.13撮影)

【基幹防除体系の例】 * 開花期7/26の場合

月	7月		8月						9月			
半旬 注)	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4
開花後日数	開花期 7/26				3週間後 8/16頃		4週間後 8/23頃		5週間後 8/30頃			
葉焼病			7月下旬以降に強風を伴った雨が 予想される場合はその前に散布									
紫斑病	1回散布(アミスター20フロアブルのみ)						注1)					
	2回散布パターン①				1回目	2回目						
	2回散布パターン②						1回目	2回目				
マメシクイガ							多発生の場合は 8月第6半旬					
カメムシ類	1回散布											
【多発生時】	2回散布						1回目			2回目		

※「半旬」: 毎月5日毎に区切った期間。例) 第1半旬=1～5日、第2半旬=6～10日

注1) エンレイは開花期4週間後頃、里のほほえみは開花期4～5週間後頃

農薬使用の際は、農薬容器や包装ラベル等に記載の登録内容(使用量・希釈倍率、使用時期、使用回数や注意事項)を確認のうえ厳守し、農薬使用者は責任をもって適正に使用してください。
薬剤が周辺ほ場に飛散しないよう散布してください。

収量180kg/10a以上、品質2～3等級をめざし、
一つ一つの管理対策を確実に実践しましょう！

農作業時は水分補給や暑い時間帯での作業を回避する等、熱中症対策をしっかりと行いましょう！